

# 「ヒロシマ」から考える平和への道

多摩市立鶴牧中学校 3年 高橋 奏瑠

私が今回、広島で原爆について学んで衝撃だったこと—それは、私と同じ年代の中学生が大勢亡くなっていたということです。その理由は、原爆が投下された8月6日、多くの中学生が建物疎開作業のため、広島市内に集められていたからです。他にも、大勢の人が被爆し、「水をくれ、水をくれ。」「先生、お母ちゃん、熱いよ〜。」と言いながら、尊い命を落としていきました。私たちにも大切な人がいて、夢や希望があるように、当時の人たちも同じでした。しかし、一発の原子爆弾により、それらはすべて奪われました。私は、そのことを現地で実際に学び、絶対に原爆（核兵器）を無くさなければ、戦争はしてはいけないと強く思いました。

そんな原爆によって悲惨な状況になった広島でしたが、広島の人々はめげずに立ち上がりました。広島の復興は、8月6日から始まっていたのです。ここでは、広島の復興について一つ紹介します。

それは、広島を走る路面電車についてです。戦時中、電車やバスの運転業務や車掌の仕事は広島電鉄家政女学校の生徒が行っていました。原爆投下のわずか3日後の8月9日には、市内電車の運行が再開することとなり、彼女たちが運行業務を行いました。彼女たちも悲しく、苦しい気持ちでしたが、人々のためにやれることをやり、一生懸命働きました。そして、復興をとげた広島では、今も路面電車が市民のために活躍しています。原爆に負けなかった車両は、現在も「被爆電車」と呼ばれながら町を走り、人々を運び続けています。

当時、多くの貴い犠牲を払いながら奇跡の復興を成し遂げた広島市民は、気力・勇気を持ち合わせていたのです。家族や自宅を失い、自分を見失いそうになっても、仕事を投げ出さない責任感、公共心があったのです。そんな心が世界平和へ向けての思いや、活動の第一歩になったのだと思います。

現在、広島では、「平和の思いを『ヒロシマから世界へ』」をキャッチコピーに、様々な取り組みが行われています。今回私が参加した「ひろしま子ども平和の集い」では、広島の小・中学生や高校生などが、平和に向けて活動をしているということを知り、刺激を受け、私も何かしなければと思いました。

私は、平和は一人では作れないと考えます。それは、私たち一人一人は微力だからです。しかし、無力ではありません。だから、私たち一人一人が力を合わせることで、とても大きな力になると思います。そのために、私はまず、今回学んだことを家族や友達など身近な人に伝えて、その中で意見交換をしたいです。そうして、平和について考える人を一人でも多く増やしていきたいです。

そして、戦争という過ちを繰り返さないためには、戦争、原爆（核兵器）、歴史について学んだり、被爆者の体験を語り継いでいったりすることが大切だと思います。その中で、「二度と繰り返してはならない」と強く思うことです。平和を願う仲間が増えれば、より世界は平和になるはずです。